

附属幼稚園における子育て支援の在り方を考える — 未就園児親子を対象としたみみちゃんクラブの実践を振り返って —

川 村 弘 子
岐阜聖徳学園大学附属幼稚園

A Consideration on what we should do for childcare support at Gifu Shotoku Gakuen University Kindergarten:

Looking back on practice for Mimichan club, activities for
pre-kindergarten children and their parents

Hiroko KAWAMURA

キーワード：子育て支援 未就園児の親子登園 子育て支援制度 園庭開放

I. はじめに

本園において実施している、未就園児親子を対象とした子育て支援活動「みみちゃんクラブ」を筆者が担当して15年が過ぎようとしている。それ以前から未就園児に対する子育て支援のような活動は行っていたが、現在の形が定着するまでには、これまで関わってきた教職員や非常勤の講師、学生達の子育て支援に対する熱意と協力体制、参加する未就園児親子の本園の子育て支援活動に対する理解と期待感が礎になっていたことを改めて感じている。

平成20年度の本紀要に、「保護者の願いに添う幼稚園教育を求めて一附属幼稚園としての子育て支援のあり方」と題して、預かり保育や保護者会活動も含めた子育て支援活動についての実践を報告した。その時の課題に、新しい幼稚園教育要領と保育所指針が、幼稚園と保育所の接近を示唆したことを受け、幼稚園から保育所への接近として①預かり保育の位置づけの明確化と共に、②子育て支援の努力義務化¹⁾を挙げた。

それから9年経った現在、どこの幼稚園や保育所でも園庭開放や未就園児の親子登園などの子育て支援活動が活発に行われ、幼稚園への入園の低年齢化がさらに進んでいるのが現状である。従来のみみちゃんクラブに参加する年齢の幼児は、すでに入園をしているためか参加数は以前よりも減少し、本園においてもその煽りを受けて、満3歳児入園の希望者が増えている。昨年度は満3歳児入園が30名を超えたため、2クラス編成にしたほどであった。

2～3歳児対象のみみちゃんクラブに加え、本学保育専修の学生が行う「なかよしサークル」や大学の専門講師による親子クッキング教室、保護者のニーズを受けて平成24年度から1～2歳児対象のぴこちゃんクラブ、平成26年度からは英語活動もスタートし、好評を得ている。

本園の子育て支援活動に参加する未就園児親子の期待に添うよう無我夢中で取り組んできた15年間であったが、節目の年に子育て支援を提供する立場、それをサポートする学生、提供を受ける保護者などそれぞれの視点で活動内容を振り返ることの必要性を感じた。少子化が進み、将来的には認定こども園への移行や2歳児枠の新設にも取り組んでいかなければならない状況の中で、本園が幼稚園として存続していくためには、どのような子育て支援を地域に提供していくことが望ましいのか、他園や地域の子育て支援センターなどとは異なる大学附属の幼稚園としての子育て支援はどうあるべきかを再度、考えてみることにした。

II. 研究の方法

本園の子育て支援活動に関わった教職員、学生、参加をした未就園児の保護者の立場から、活動の内容や取組み方などについて実施した意識調査やアンケート結果を参考にしながら、活動内容を振り返ると共に今後の在り方を考える。

また、大学が行う子育て地域センターの実態を見学したり、担当者に様子を聞いたりしながら幼稚園で行う子育て支援との違いや共通する部分に気づき、今後の参考にさせていただく。

- (1) 本園の教職員＝子育て支援を提供する立場から
15年間の子育て支援活動を振り返り、成果と課題を考える。
- (2) 本学の学生＝子育て支援活動をサポートする立場から
これまでの本学保育専修の学生達の関わり方について振り返り、平成29年7月に実施した意識調査の結果を基に学生主体の取組みの方向性を探る。
- (3) 参加の保護者＝子育て支援を受ける立場から
平成28年12月に実施したみみちゃんクラブとびこちゃんクラブの参加者45名、平成29年7月のみみちゃんクラブ参加者57名を対象にアンケートをとり、その結果から母親達が望む子育て支援の在り方について考える。
- (4) 大学で行う子育て地域センターの実態から
専門講師や保育を学ぶ学生も含めた子育て支援活動を参考に、大学の附属幼稚園である本園が目指す子育て支援の在り方を考える。

III. 実践内容

1. 子育て支援を提供する立場から

平成14年、園長の三尾悟氏が現在の「みみちゃんクラブ」の基礎となる形を創り、地域への参加を呼びかけた。活動の趣旨は「就園前の幼児に安全な遊び場と親子がふれあえる楽しい遊びを提供すること」を第一とし、その思いは現在も引き継がれている。三尾園長は、小中学校の校長や児童館館長の経験を生かし、地域の子ども達へ様々なあそびが提供できる児童館の職員やパネルシアターのサークル活動を続けていた母親の会を招くなどしながら、地域が求める子育て支援活動の在り方を模索していった。スタート当時は、決して参加者が多いわけではなかったが、園児の弟妹や参加者の口コミにより、徐々に参加人数が増えていった。

当時は筆者と職員の名で担当しながら活動内容の計画、準備、活動当日の進行、募集活動などすべてを担う状況で余裕がなく、外部からの講師を招くことは、第三者的な立場で活動に参加でき、参加者の様子も落ち着いて見守ることができた。外部講師を頼らなくても自分たちの力で進めることができるようになった頃、当時、本学に在籍されていた幼稚園コースの荒木照子教授からゼミ生による「なかよしサークル」（みみちゃんクラブ参加の親子から希望者を募り、幼児教育を志す学生達があそびを提供しながら幼児の発達を継続して観察する活動）の依頼を受け、年3回程度土曜日の午前中に実施した。後に担当者やその形態を変えながらも現在まで、学生による「なかよしサークル」は継続して行っている。

試行錯誤を繰り返しながらみみちゃんクラブの活動を行う中で、徐々にあそびの資料や子育て通信の必要性を感じたため、作成して参加証を兼ねたファイルに毎回綴っていくよう参加者に呼びかけた。みみちゃんクラブの活動中に提供した季節の歌や親子ふれあい遊び、手遊びなどが家庭でも行うことができるよう、楽譜や遊び方もイラストを交えて掲載するようにした。また、通信には子育ての参考になるよう幼児の発達や病気について、食育や基本的な生活習慣を身につけるためのアドバイスなどを内容に組み入れながら作成した。通信については本園のホームページにも掲載し、事前に参加を呼びかけると同時に母親達が子育ての悩みを少しでも軽減できる情報となるように努めた。(図1)

活動内容については、母親達の要望も参考にしながら、製作遊び、運動遊び、リズム遊び、絵本、紙芝居など偏りがないよう立案した。



図1 親子で手遊びを楽しむ

年に3回程度は、園児も参加し、母親達が園児の様子に関心を抱き、我が子の成長に見通しと期待がもてるような機会とした。また、1年の締めくくりとなる3学期の活動では、幼児が好きな遊びを自由に楽しめる環境設定をして、母親が我が子の様子を客観的に見ることができるよう内容にしたり、園児とのふれあいの機会がもてるようなごっこ遊びを取り入れたりした。

2～3歳児対象の活動とはいえ、2歳未満の参加希望も増えてきた頃、1～2歳児対象の「ぴこちゃんクラブ」を10～12月の毎月1回行うようにした。みみちゃんクラブの前段階として行うこの活動にも、親子ふれあい遊びを綴ったファイルや子育ての情報を盛り込んだ通信を毎回配布するようにした。みみちゃんクラブほどの参加人数ではなかったが、乳幼児が母親の膝に座って落ち着いた活動を行うことができた。3回のぴこちゃんクラブ終了後は、みみちゃんクラブに移行して参加をする親子も多かった。

平成26年からは、外部講師を招いて英語に触れる「英語であそぼう」を取り入れたところ、予想を超えた参加希望があり、母親達の英語に関するニーズの高さを感じた。特に今年度においては、年6回の活動に増やし、継続した参加を求めるように募集をしたところ、問い合わせが多く、活動時の様子からも母親達の我が子に早期からの英語教育を求める気持ちが強く感じられた。



図2 講師の指導を受けながらクッキングを楽しむ親子

大学の専門講師の協力を得て、親子クッキング教室も年2回行うようになった。乳幼児期からの望ましい食習慣を身につけ、食を通して豊かな人間性を育てていくためにも、母親と幼児が環境の整った大学の調理室で活動できることは有効であった。また、専門講師から身近な材料でできるおやつや野菜嫌いをなくすためのメニューなど母親達の要望も取り入れながら指導を受けることができた。(図2)

2. 子育て支援活動をサポートする立場から

近年は本学保育専修との連携により、みみちゃんクラブには毎回学生ボランティアの協力を得ている。毎年4月に行われる保育実習指導の授業に筆者が外向き、みみちゃんクラブの趣旨や概要を説明したり、前年度の活動の様子を写真で紹介したりしている。その後、毎回5～6名程度の学生がシフトを組んで園を訪れている。スタッフの人手不足により、きめ細かな対応ができなかったり、活動の幅が限られたりする状況の中で、すでに幼稚園や保育所実習を経験している4年生の学生達の動きは、当日だけの参加であっても大きな力となった。特に手遊びやリズム遊び、絵本の読み聞かせなどにおいて、細かい打ち合わせをしなくても学生自身が理解、判断して主体的に遊びの提供をすることができた。(図3)



図3 参加者の前に立って手遊びを行う



図4 親子とふれあいながら製作の援助をする

り、それぞれのグループにサポート役として入り、製作あそびの援助をしたり、絵本などの読み聞かせをしたりするなど学生と母親達が直にかかわることも可能となった。集団(親子)対個(指導者)の活動は、参加者が受け身になりがちで、後方にいる母親達は話が聞こえづらく私語を始めることも少なくはなかった。できれば小集団で丁寧なかかわりを持ちたいと考えていたことが実現でき、学生にとっても参加者にとっても有意義な活動になったと思う。将来、小学校や幼稚園、保育所などへ就職していく学生達にとって、子育て支援活動に参加をする親子と関わり、その様子を間近で見る経験は、今後の参考になるであろうことを期待したい。(図4)

先にも述べた「なかよしサークル」については、連続した活動の中で学生達が担当する子どもの成長記録を文字と写真でアルバム形式にまとめ、参加をした母親達からも大変好評だった。しかし、完成度を求めると学生への負担も大きく、継続することは難しかった。そのためゼミ単位のなかよしサークルから、保育専修の学年単位で参加したり、今年度のようなみみちゃんクラブの中に、なかよしサークルを位置づけ、学生達で立案から進行まで行ったりするなど、主体的に取り組めるようにした。11月と12月になかよしサークルを実践するために、事前にもみみちゃんクラブのボランティアとして参加することは、平成29年7月に行った意識調査の結果にも表れている。(図5)

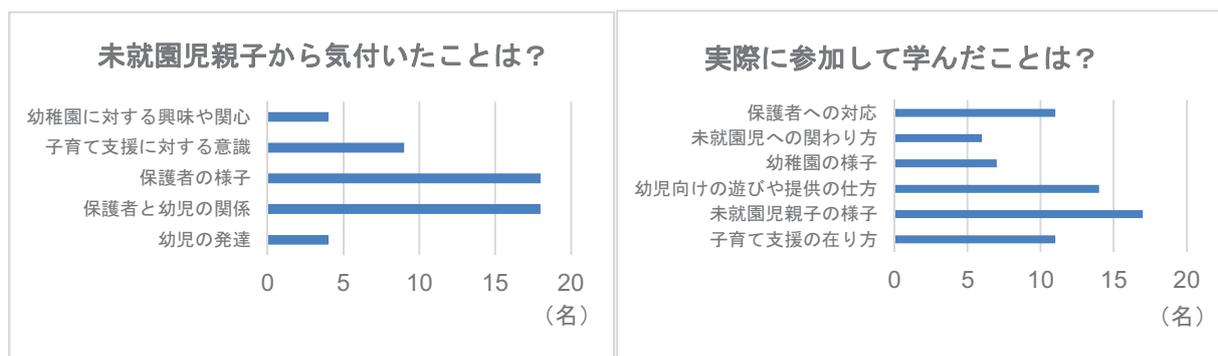


図5 保育専修の学生22名を対象に行った意識調査の結果（複数回答可）

実際に活動を計画・実践する上で、配慮したいことを尋ねたところ、学生達からは次のような回答が寄せられた。

- ・母親や子どもが安心して居心地良く参加できるよう、笑顔で迎え入れたり、積極的に声をかけたりしていきたい。
- ・母親が「家でもやってみよう」「真似してみよう」と思えるようなふれあい遊びや工作をしたい。
- ・母親同士の関わりも支えられるような配慮をしたい。
- ・親子だけでなく、他の親子とも関わることができる活動をする。
- ・乳児を連れてくる方もあるので、活動の際には無理なく参加できるよう手伝ったり、母親に代わって傍で子どもと一緒に活動をしたりする。
- ・前の方にいる親子だけでなく、後方の親子達を置き去りにすることがないように、学生の立ち位置を考え、全体が楽しめるようにする。
- ・時間配分を考えた上で、臨機応変に対応できるよう、いくつかのパターンを考えて学生間で共有しておきたい。
- ・一人で活動できる子もいれば、保護者の方と一緒にないとできない子もいることに配慮して、親子でできる活動を考えていきたい。
- ・絵本を読む際には、いかに子どもの視線を集められるか、導入などの工夫に心がける。
- ・座り続けることは難しい年齢なので、動きのある遊びも取り入れ、安全面には配慮すること。
- ・子どもの成長、発達に合わせた活動ができるようにする。
- ・子どもの視点、母親の視点の両方から活動を考える。
- ・活動の内容には、親子のふれあい（スキンシップ）を必ず取り入れる。
- ・子どもが自分でシールを選んで貼るような子ども主体の活動にする。
- ・活動スペースが広くとれない可能性があるため、けがのないよう安全に活動できるような内容を考え、スペースをうまく利用できるようにしたい。

3. 子育て支援を受ける立場から

筆者がみみちゃんクラブを担当した頃は、現在のように子育て支援活動が盛んに行われていなかったため、地域においては児童館若しくは保育所の園庭開放が未就園児の利用しやすい遊び場所になっていたと思われる。そのため、子育て支援が行われるところに対象者が集中し、そこで顔見知りとなって情報交換をしながら次の開催場所を求めて参加者が移動していくような状況であった。

本園のみみちゃんクラブにおいては定員を設けていなかったため、多い時には100組を超えることもあり、狭い空間の中で行う活動にはやや無理も生じていたと思われる。また、定員を設けた児童館などにおいても、かなりの参加者があり、あえて広く募集の情報を流すことは取りやめたという話を担当者から聞いたこともある。それほど、当時は子育て支援の場を求める母親達が多かったことが考えられる。

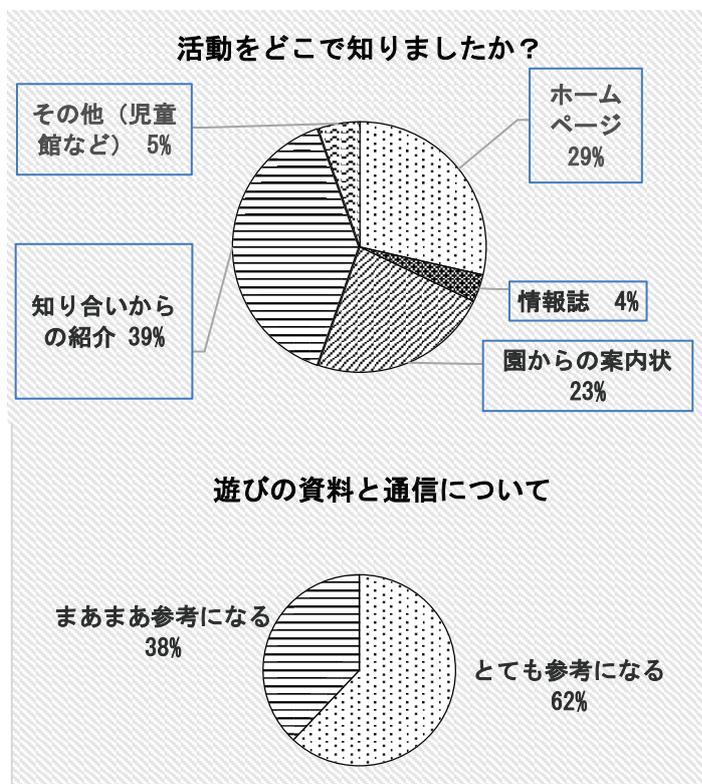


図6 子育て支援活動に参加の保護者102名を対象に行ったアンケート結果（複数回答可）

みみちゃんクラブの1年を締めくくるときの活動では、園児が品物を作ってお店屋さんになり、参加の親子が手作りのバックやチケットを持って買い物を楽しむという恒例の交流活動を行っている。入園を間近に控えた幼児達が園児と触れ合いながら就園を心待ちにしたり、母親達が園児の姿を我が子と重ね合わせながら成長に期待感をもったりすることができるような機会にしている。（図9）



図7 誕生日会で我が子の姿を撮影する母親達



図8 パネルシアターを通して交流を深める親子

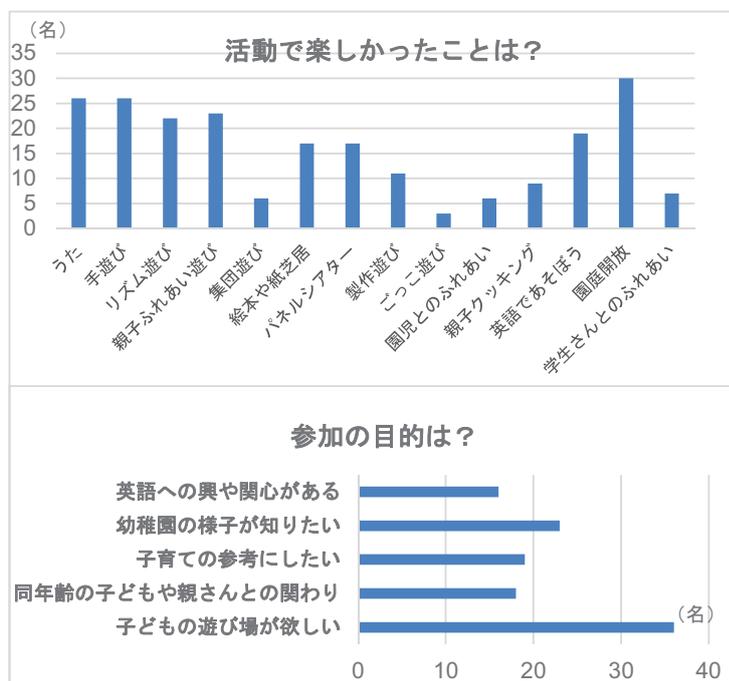


図9 お買い物ごっこを通して園児とふれあう

近年はどこの園でも子育て支援活動を計画的に実施していることや、満3歳からの入園が増えたこともあり、みみちゃんクラブの参加人数が比較的安定し、年々、低年齢化の傾向にある。母親が仕事をしていなければ入所できない保育所に比べて、母親が働いていなくても満3歳になれば入園できる幼稚園や認定こども園が増えたことで、子育て支援を受ける未就園児親子が減少してきたのかもしれない。そんな中で、本園が現在行っている専門的な講師による英語活動や、大学の施設を利用し専門

の講師からクッキング指導を受けられるような活動は、独自性があり保護者にとっては魅力ある子育て支援なのであろう。

平成 29 年 2 月と 7 月に参加の保護者を対象に実施したアンケート結果は次の通りである。(図 10)



子育て中の母親達は、我が子を安全でのびのびと遊べる場を求めていることがわかり、親子で不安感やストレスを解消できることが必要であると考えられる。かつて乳幼児をもつ母親が近くの公園へ遊びに行き、同年齢の母親達の仲間入りをするを「公園デビュー」と言われた時代もあった。しかし、遊具の安全性や不審者などの危険性、限られた空間での人間関係を考えると、すでに園児が遊んでいる幼稚園という環境は、我が子を遊ばせるのに安心な場であると思われる。なおかつ将来の入園を考えた時には、幼稚園の様子が間近で見られることも、母親達にとっては関心のある要因になっていると思われる。

図 10 子育て支援活動に参加の保護者を対象に行ったアンケート結果 (複数回答可)

4. 大学で行う子育て地域センターの実態から

本学にも岐阜キャンパスにおいて、昨年度から地域子育て支援センターが開設され、多くの利用者が訪れている。学内にセンターが併設されていることで幼児教育の専門家から様々な指導が受けられたり、毎月の身体測定に専門の教員や学生が立ち合ったりするなど、大学ならではの機能を発揮することができるのではないかと考える。幼児教育を志す学生達にとっても、間近で乳幼児の姿を見る経験は実習とは違った気軽さや微笑ましさを感じ、子ども理解を深めることのできる体験にも繋がっていることと思われる。また、センター内に本園の子育て支援活動の案内を掲示したり、利用者に配布してもらったりすることで、みみちゃんクラブや英語であそぼう、親子クッキングなどの活動に参加を希望してきた保護者も増えているのが現状である。機能は違って同じ学園内で行う子育て支援活動として連携がとれていることに感謝している。

筆者も長年、幼稚園に勤務してきた経験から、未就園児の母親達を対象に行われている子育て支援講座を担当させていただく機会ももった。幼稚園の様子を紹介しながら就園までに身につけておきたいことを現場の状況も交えてお話させていただいた。10名ほどの母親達と膝をつき合わせて、映像と資料をもとに1時間ほど話題を提供し、終了後には、子育てに悩みをもつ母親や、仕事に復帰する際、子育てとの両立はどうしたらよいかなど個人的な相談に応じることになった。参加者の多い本園のみみちゃんクラブではこれまでなかったことであり、こうした少人数の場の方が、話しやすい環境にあることを改めて感じた。

平成 18 年からキャンパス内に開設している子ども家庭支援センターを 8 月に訪れ、担当者から貴重なお話を伺うことができた。開設当初にも伺ったことがあり、今回 2 度目の訪問となった。事業内容として、親子の居場所の提供・親子で楽しく遊び学ぶプログラムの提供・子育ての相談に応じる場・学生が実体験をとおして学ぶ場・次代における子育て、家庭支援の先駆的なあり方を模索する場・保育の交流と研修の場 を掲げ、計画的かつ実践的な活動を提供されていることに敬服した。広いフロアにさまざまな遊びのコーナーが設けられ、大型の木製遊具に加え、ぬくもりのある木の玩具や人形、絵本なども充実しており、いつ訪れても幼児がすぐに遊びたくなるような室内環境であった。隣接し

た事務所の中にはベビーベッドも用意され、乳児をもつ母親達も気軽に利用できるような体制が整えられていた。

担当者と話をしていく中で、母親達の子育てに対する意識が変わってきていることや、利用する幼児が低年齢化していること、子育て支援の場が増えてきたことで、利用者が日によって変動することなど筆者が感じている現状と共通するところが多くあった。開設当初はできるだけ扉を開き、利用者を温かく迎え入れることに重点を置かれ、母親達の子育ての不安やストレスが発散できるような関わりや活動を続けてこられた。担当者は遊具や玩具はあくまでも子どもの遊び道具であり、大切なのは人との関わり＝コミュニケーションであることを強調された。子育ては成果がすぐに現れるものではなく、家庭に閉じこもって子どもと向かい合うだけの生活には息苦しさが生じることもある。同年齢の子どもをもち、同じような悩みがあることや、我が子以外の子どもの様子を目にすることで、心にゆとりがもてるようになるのではないかと思った。

様々な取組みを続けてこられた中で、印象に残ったのは母親達に子育てをしながら達成感を味わえるような製作活動を提供されていたことである。到底自分だけではできないことも、センターに通って少しずつ指導を受けながら取り組むことで、徐々に出来上がる喜びや楽しさを母親達が感じる事ができたようである。子育てをしながらも自分の時間をもちたいと思う母親は多く、子どもを傍におきながらでも地道にできるような環境や活動内容が大切であることを感じる機会になった。担当者的な子育て支援に対する熱意と常に前向きに取り組まれる姿勢に、筆者も自分の活動を振り返るきっかけとなったことを感謝している。

IV. 考察・分析

1. 子育て支援を充実していくための組織づくり

15年間にわたりみみちゃんクラブの活動を継続して行う中で、当初は外部講師などの援助を受けていたが、徐々に独自の力で言うことができる体制が整い、参加する未就園児親子の様子を見ながら内容を考えたり、資料を作成したりして子育てに関する様々な情報の提供ができるようになってきた。これは子育て支援活動を行いながら、幼児やその保護者と直にふれることにより、提供する側が学んだ大きな資産といえる。新聞記事の掲載や折り込み広告、情報誌への掲載、ホームページでの情報公開など活動を広く社会に伝えることにより、参加者が徐々に増えてきたことも影響し、母親達が早期からの参加を希望するようになった。その頃から1～2歳児対象の活動を増やしたり、大学との連携や協力により専門講師によるクッキング活動を行ったり、保育を学ぶ学生達がボランティアとして関わったことは、本学ならではの有意義な活動であったといえる。

未就園児親子が集いやすい幼稚園を拠点として、幼稚園や大学の教員がその専門性を発揮し、学生が将来を見据えた学びの機会として子育て支援に参加できる組織を今後も大切にしていきたいと思う。

2. 未就園児親子が求める子育て支援活動の充実化

みみちゃんクラブを始めた頃に比べて、地域の子育て支援の場が増え、子育て中の母親達が活動の場を選んで参加ができるようになったことは喜ばしい状況である。アンケートの結果にも表れているように、安全で安心して子どもを遊ばせることのできる場で同年齢の子どもをもつ母親達がお互いの悩みや子どもの様子を語り合い、そして将来の就園も考慮して園の教員と関わり、園児の様子も垣間見ることが出来る機会は、母親達にとって参加してみたい場と言えるのではないだろうか。

園庭でのびのびと遊びながら、様々な遊びの提供を受け、学生や園児達と関わり、さらには専門的な指導が受けられることは魅力ある活動内容にも繋がる。今後も母親達が何を求め、どんな園を希望するかを見極めながら内容の充実を図ることが必要である。

3. 大学の附属幼稚園としての子育て支援の模索

本学も含め近隣のキャンパス内で行われる地域子育て支援センターが充実した内容を提供しているのが現状であることを踏まえ、他園とは異なる支援の仕方を考える必要性が求められる。例えば、今年度初めて実施するような、みみちゃんクラブに学生主体の活動を組み込んだり、母親達の要望を取

り入れたりしながら、在園児保護者も交えた専門的な学びの場を提供し、学生や園の職員が託児を行うことも有効であると考え。また、広い芝生のグラウンドや温水プール、体育館などの恵まれた環境を活用したイベントに学内からの人材協力を募ることができればと考える。

特に子どもの発達で悩む母親にとっては、地域の検診などで指摘を受け、療育を受けるケースも増えている状況の中で、個別の相談窓口や専門的かつ分かりやすい研修の機会³⁾があるとより前向きに子育てができるようになるのではないかと考える。

V. まとめと課題

近年、核家族化、少子化、情報化等の社会状況が広まり、子どもにどのようにかわればよいのか悩んだり、孤立感を抱いたりする母親の増加も指摘されている。子育ては喜びや生きがいを感じる一方で、思うようにならない不安やストレスもあり、母親が安定した温かい心で子どもに向き合える時ばかりとは言い難い。筆者も子育て中には決して楽しい時ばかりではなく、子どもに辛くあたり、自分を責める経験もしてきた。ある母親が3人の子育てがひと段落して仕事を始めたとき、地域に貢献できる喜びや家庭以外の社会に出られる楽しさを感じたと話していた。それほどに子育ては孤独であり、母親の使命ではあるが、責任も重く、当然のこととして考えるには、母親の負担が大きすぎるのではないだろうか。

そうした状況を踏まえながら、子育て支援制度ができ、地域ぐるみで母親達を支援したり、早期からの入園制度が認可されたりするなど、急速に体制が整えられつつある。⁴⁾しかし、大切なのは乳幼児期において保護者との温かいつながりに支えられて幼児の心が安定して育つということであり、そのための支援を考えていく必要性である。母親が子育てを楽しむために、人生で大切な乳幼児期にどれだけ子どもと向き合うことができたかによって、その後の成長に大きな影響があるといっても過言ではない。将来を逞しく生きる子どもに育つためにも、子育てを支援する側が、その意義を理解しながら広い心で受け入れることが大切である。

また、幼稚園においては日常保育と並行して子育て支援活動を行っているため、保護者達は園児がいかにものびのびと園生活を過ごしているか、教員とのかかわり方はどのようにされているのかも、興味深く見ている。私たち保育者は、保護者に信頼されるよう子ども一人ひとりをよく見ること、子どもの安全を守り、命の大切さを伝えること、子どもの様子を丁寧に保護者に伝え、保護者の相談にも積極的に応じることが在園児に対する子育て支援の原点であることを心にとめておかなければならない。その上で、地域に対する子育て支援活動の目的や内容について、教職員間で共通理解を図りながら今後も協力体制を整えていくことが必要である。

謝辞 本園の子育て支援活動に対し学園内外の皆様方にご理解、ご協力をいただき運営できましたことを深く感謝いたします。また、15年にわたりよきパートナーとして支えてくださった脇田成子教諭に心より感謝いたします。

注・文献

- 1) 保護者の願いに添う幼稚園教育を求めて—附属幼稚園としての子育て支援のあり方—
岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要8号(2008年度 91-103)
- 2) 文部科学省(2009.3) 幼稚園における子育て支援活動について
- 3) 文部科学省幼稚園教育要領比較対照表(平成29年3月31日告示)

平成21年4月から施行された幼稚園教育要領第3章の第2 教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動の留意事項の2において、「幼稚園の運営に当たっては、子育て支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して・・・(中略) 幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」と子育て支援の必要性が明文化された。さらに平成30年4月からの改定により、「幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組みを進めること」「心理や保健の専門家、地域の子育て経験者等と連携・協働しながら取り組むよう配慮すること」と新たに加えられる。

- 4) 柏女霊峰 子ども子育て支援制度を読み解く その全体像と今後の課題(誠信書房)